

「オネエ所長の調査ファイル」 # 27

山崎浩治

1

「せっかく女に生まれたんだからスッピンはやめなさい、サオリ。それじゃ白馬に乗った王子様は迎えに来てくれないわよ」

「何が王子様よ。白いパンストに提灯ブルマみたいなのを履いたヤツに興味ないね」

「あんたって夢がないわねえ。あたしのメイク、参考になさいって。ほら、アイプチで二重まぶた、かわいいでしょ」

「何そのセンス、あり得ない。目元がパッチリしてる分、余計キモイわ！」

「あたしの女装は優しく受け止めて。こう見えて心は傷つきやすい女子高生なんだから、クレームは受け付けません。ご了承ください」

「西野カナのトリセツみたいに言うな！」

「プライベート・リサーチ」のオネエ所長、市山とその娘のツンデレ調査員・沙織が金沢市内の住宅地で張り込み中だ。この日の市山は、ふわふわのファーがついたダッフルコートを身にまとい、女子高生のデート服のような女装をしている。

今回の依頼人は会社員の雅也(32歳)である。東京の有名私大を卒業後、地元大手企業に就職、半年前に知人の紹介で知り合った会社員の妻・梓(25歳)と金沢市内のホテルで盛大な結婚式を挙げ、海外ビーチリゾートでハネムーンした後、雅也の実家で新婚生活を始めた。ところが1カ月前、妻が家を出て実家に帰り、離婚を求めてきたのである。市山と沙織は「有利に離婚をするための証拠をつかんでほしい」という依頼を受け、梓の周辺を調査しているのだ。

「奥さんが家を出たのは嫁姑のバトルが原因ね」

張り込みの合間、沙織が断言した。雅也は中学時代に父を交通事故で亡くして以来、母一人子一人の生活。「女手一つで育ててくれたおふくろをないがしろにできない」と孝行息子ぶりを発揮して結婚後は母と同居している。市山が沙織の説に異議を唱えた。

「だけど結婚半年足らずで実家に帰るのは早過ぎない？」

「きょうびの若い女は辛抱が足りないからね」

「他人事みたいに言いなさんな。沙織だって若い女じゃない」

その時、実家から梓が現れ、軽自動車に乗り込む。その容貌を目の当たりにした沙織が息を飲んだ。

「奥さん、写メで見た以上に美人ね。ブサメンの依頼人とどうして夫婦になったんだろう」

車を発進させる梓の顔色は悪く、表情に生气は感じられなかった。

2

「奥さんは勤め先を休職して、心療内科に通院中よ。会社にはうつ病の診断書を提出しているわ」

数日後、「金沢プライベート・リサーチ」を訪れた雅也に市山が報告している。ブランドスーツに身を固め、細々とした持ち物にも高級品をそろえた雅也が軽い口調で言った。

「そーいや勤め先がブラック企業だと言ってたよ。嫁のうつ病を理由に離婚できるかな？」

「それって、どういう意味かしら？」

「嫁に慰謝料を請求できるかってこと」

「あなたとの結婚生活で精神に変調を来したのかもしれないのよ。そうなれば慰謝料を請求されるのは、むしろあなたの方」

「あっそう。で、男性関係はあった？」

「ないわね。ギャンブル、飲酒、浪費など、奥さんに離婚原因となるような理由は一切見当たらなかったわ」

「それは残念だなあ。ねえ、お宅では`別れさせ屋、的'なことはしてないの？」

「はあ？」市山が眉を上げた。

「嫁に男を接近させて浮気させ、その証拠を握ってこっちに有利な条件で離婚するんだよ」

「あなた、自分が何を言ってるか分かってるの？」

市山が怒りを含んだ声で尋ねると、雅也が平然と答えた。

「嫁に落ち度を作って離婚したいんだ。そしたら慰謝料請求できるでしょ。探偵さん、嫁に男がいるってなったら慰謝料600万円ぐらい請求できるよね？」

3

結婚相手は学歴や肩書き、経済力といったスペックで選んでどこが悪いのだろう。就職だってその会社が好きでたまらず入社した人は少ないはずだ。会社の将来性やブランド力、給料や待遇で決めている人間が大半だろう。婚活サイトで知り合った夫は外見こそ並み以下だったものの、有名大学を卒業し、安定した地元企業に勤める掛け値なしのハイスペック男子。回転ずしで言えば、高価な金ぴかの皿に載ったカップ巻きではあるが、食べてしまえば大トロもカップ巻きも関係ない。そう考えて結婚を決めたのだ。

これまでの人生で一番つらかったのは就活だった。授業もバイトも友達付き合いもほどほどにこなし、3年後期になってようやく就職を意識したが、20社以上受けた会社からはことごとく不採用を知らせる「お祈りメール」が返ってきた。どうにか面接にまでたどり着いた会社では「なんでもやります。頑張ります」とやる気をアピールし、ようやく内定をゲット。安定した収入とプライベートの時間を確保できるなら正直、どこでもよかったものの、入社してみるとそこは長時間勤務のブラック企業だった。平日は鬼の残業を強いられ、週末は疲労困憊して寝て過ごす。こんな生活がまだ何十年も続くのかと思うと暗澹とした気持ちになり、早く結婚しないとやばいぞ、と危機感が募った。

大学時代や会社の同期を誘い、仕事で疲れた体にむち打って合コンや街コンに参加してみても帯に短し襷に長しで、これという人が見つからない。出会って相手の性格や経済力を探り合い、どうにかこうにか交際に至っても「なんか違う」と振り出しに戻っているうちに、あっという間

に2年が過ぎた。漠然と結婚相手を待っていても白馬に乗った王子は現れない。このままでは就活の失敗を婚活でも繰り返してしまうと相手のプロフィールや条件で検索できる婚活サイトに切り替え、選りすぐりの顔写真を掲載したところ、交際希望者が殺到した。

なかには既婚者やセックス目的、父親とそう変わらない年代の男もいたけれど、メールのやりとりや相手のSNSをチェックすることで性格もなんとなく分かり、数人の候補から絞り込んだのが雅也だった。さえない風貌もあって婚活では苦勞していたのだろう。最初のデートで結婚を匂わされ、3回目で早々とプロポーズ。「結婚後は母親と同居」「子どもができるまで仕事を続けてほしい」という条件はマイナスポイントだったが、セレブ御用達ブランドの婚約指輪にホテルでの豪華挙式、海外ハネムーン、新婚生活の家財道具一式にかかわる費用をすべて雅也が用意するという至れり尽くせりの申し出に、即答で結婚を了承した。梓自身、早く寿退社したいという焦りもあった。ところが結婚初夜、雅也はこう切り出したのだ。

「結婚費用はすべて借金でまかなったんだ。僕たち夫婦になったんだから、これから二人で力を合わせて返済していこう。おふくろも協力するって言ってるから」

4

「あなたが結婚した相手は、サイテー男・オブ・ザ・イヤー、の栄冠に輝く人だったわ。こんなヤツに依頼人ヅラされるのは探偵の沽券にかかわるから、調査料を叩き返してやったの。義によって、あなたに助太刀するわ」

「金沢プライベート・リサーチ」に梓を招いた市山が言った。

「ダンナを調べてみたら、実家の登記簿には500万円の銀行の抵当権がついてた。ちなみに土地・建物の名義は母親よ。親子の連帯債務でブライダルローン借りたのね。それ以外にもカード会社と消費者金融に200万円の借金、600万円の奨学金と車のローンもあったから、自分の給料は毎月の返済でほとんど消えていたでしょう」

市山の言葉に、険しかった梓の表情がほころんだ。

「そうなんです！ 生活費は私の給料でまかなうから、会社を辞めないでくれ、って。これって一種の結婚詐欺ですよ。夫を結婚詐欺で訴えることはできませんか」

「詐欺は不当な利益を得ようとして身分を詐称することよ。彼は身分詐称していないし、あなたと結婚もしてる。結婚詐欺とはいえないわね」

「……そうですか」残念そうにつぶやく梓に市山が厳しく言った。

「あなただって、ちょっと迂闊すぎるわよ。個人情報厳しく言われるようになって、いまではすっかり影を潜めたけれど、昔は結婚を前に相手の身元を調査することが珍しくなかったの。ちょっと調べれば、夫の経済状況は分かったでしょうに」

梓がしゅんとして肩を落とす。市山が続けた。

「彼は母子家庭で、母親は小さな会社の事務員。いくら夫が大手企業勤務だからって、身の丈に合わない結構費用に不審を感じなきゃ」

「すみません」

「あたしに謝らなくていいわよ。ダンナの方も婚活が失敗続きで、ずいぶん焦ってたみたい。`母親と同居、という条件はやはり不利だからね。それにしたって高価な餌であなたを釣って結婚後、その餌代を割り勘させるなんて男の風上にも置けない。しかも離婚となったら慰謝料で払わせようとする。このサイテー男を成敗してやりましょう！」

5

梓は離婚調停を申し立て、慰謝料として500万円を請求した。調停委員は結婚費用を借金で捻出した雅也に批判的で、数度の話し合いの末、慰謝料200万円を支払うという条件で離婚が成立、ほどなく雅也は自己破産を申し立てた。それを知った梓から「元夫が自己破産したら慰謝料を取れないのではないかと相談を受け、市山は「たとえ自己破産しても慰謝料の支払い義務を免れることはできないわ。ただし、元夫に支払い能力がなければ回収しようがない。相手の財産を差し押さえをする方法もあるから、法律の専門家に協力してもらいなさい」と助言した。

梓は即座に弁護士に依頼して交渉を始めたものの、実家の土地・建物が母親名義である以上、慰謝料を回収するための強制執行もできないまま、抵当権を設定した銀行が競売にかけて売却。慰謝料はやむなく分割で受け取るようになった。

「結局、元夫は自己破産で借金をチャラにしたわけか」

「自己破産が浪費やギャンブルといった自業自得の場合、裁判所は借金を帳消しにする`免責、の決定をしない場合もあるけど、今回は破産者の経済的再出発を考慮して、免責を許可したみたいね」

「金沢プライベート・リサーチ」で市山と沙織が調査を振り返っている。市山が言った。

「実家を手放したとはいえ、結婚費用で作った借金を自己破産で帳消しにするのは虫が良すぎるわ。安定した収入があるのだから民事再生で借金を圧縮して返済するのが筋なのに」

数カ月後、梓がぶらりと「金沢プライベート・リサーチ」にやってきた。離婚して見違えるように元気になっており、最近は熱心にお見合いパーティに参加しているという。

「あなたも懲りない女ねえ」市山が呆れると、梓があっけらかんと答えた。

「男は不動産と同じなんですよ。優良物件はすぐになくなっちゃう。30女には優良物件は残っていないから、20代のうちに結婚したいんです」

「そんなに結婚したいものかしら」

「そりゃあ、したいですって。早くブラック企業を辞めたいですから。でも男の人と交際するのは面倒なんですよねえ。ドラマの『逃げ恥』みたいに、条件が合った人と契約結婚できないかなあ」

「そんなこと言ってたら、またサイテー男に引っかかるわよ」

「ですよ！ あたし離婚してイエローカードをもらったから、次も失敗したらレッドカードで一発退場でしょ？ 今度、意中の人ができる時は探偵さんにしっかり調査してもらおうからお願いします！」

やれやれ、と市山が心の中で、ため息を吐いた。